

第 4 回多治見市第 7 次総合計画策定市民委員会 会議録

日 時	平成 27 年 4 月 27 日 (月) 午後 6 時 00 分～午後 7 時 00 分
会 場	多治見市役所駅北庁舎 4 階第 3 会議室
出席委員	古池嘉和委員 (会長)、木下貴子委員 (副会長)、飯野真理子委員、伊藤浜三委員、宇佐見信一委員、奥村崇仁委員、隈元智子委員、小池雅子委員、竹本幸二委員、堀尾憲慈委員、前田市朗委員、宮村登美子委員、山田輝幸委員、吉田有記委員 (委員 15 名中 14 名出席)
欠席委員	若尾由美江委員
事務局	水野企画部長、桜井課長、岩島課長代理、長谷川課長代理、水野総括主査、山内総括主査、林主査
傍聴人	2 名
会議録要旨	
1	開会あいさつ (古池会長あいさつ)
2	<p>議題 (1) : 第 3 回市民委員会会議録について</p> <p>事務局 資料 1 「第 3 回市民委員会会議録」について事務局から説明</p> <p>会長 修正すべき点等あれば指摘を求める。 《なし》</p> <p>会長 第 3 回市民委員会会議録とする。</p>
	<p>議題 (2) : 基本構想の策定に向けて</p> <p>事務局 目指すまちのキーワード (案) について、資料 2 「マニフェストに掲げられた古川市長の政策方針」、資料 3 「討議課題集 Q & A」を用い事務局から説明</p> <p>会長 20 年、30 年後を見据え、多治見市はどのような都市を目指すべきか各委員の意見を伺いたい。</p> <p>委員 消滅可能性都市に多治見が選ばれたことはショックであった。中日新聞の過去の出生率低下に関する調査で、男性は経済的な支援を求め、女性は子育てしながら働ける環境を求めている。そのため、子育てしながら働けるまちになってほしい。</p> <p>委員 暮らしやすいまちになってほしい。そのためには、観光や陶磁器などにぎわいがあり、人が集まるようなまちにならないといけない。</p> <p>委員 過去・現在・未来がつながるまちになってほしい。 多治見市には歴史 (美濃焼・西浦焼) や文化、偉人などもいるが、市民でも知らない人が多い。子どもへの教育や大人も学ぶ場が必要ではない</p>

か。

人が集まるまちになれば、お金も集まるのではないか。

子どもが結婚後も多治見に住みたいと思えるまちになってほしい。

委員 人がアツイまちになってほしい。活気、元気があるまちになってほしい。そのためには、人と人とのつながりが薄れている世の中で、高齢者から若者、隣近所などつながりが必要である。

委員 郊外の住宅団地は市外からの転入者が多く、もともと地縁も血縁もない。そのため、子どもが卒業後、市外に出て行ってしまい、残された住宅団地はどうなるのか心配だ。

子どもが卒業後も市内に残れるためには、働ける場の支援が必要である。20～30年後に、今の子どもが多治見で暮らせる状況を作ってあげたい。

委員 市民一人一人が幸せだと実感するまちになってほしい。そのためには、生きがい・働きがいがないといけないと思う。その意味からも事務局案の「ひとの“わ”」、特に「人との調「和」」が重要である。

委員 ふるさとである多治見を誇れる人になってほしい。そのためには、大人が元気で楽しく生活できるまちでなければ、子どもたちに大人になることを楽しみにしてもらえないのではないか。

委員 元気な高齢者は、郊外の団地などに散らばって住んでいる。高齢となり運転ができなくなったとき、コミュニティバスを利用しやすくし、市内に散らばっている活力を混ぜ合わせる必要がある。その意味からも事務局案の「わ」は良いと思う。

多治見市には児童館が一小学校区に一つあり、充実している。しかし、児童館でどのような取組が行われているかが重要である。現在、発達に心配な子どもが増えているが、乳幼児期の対応が大切である。児童館で発達に心配な子どもや親を支援できるよう考えていく必要があるのではないか。

今ある多治見の力を使って、さらに深めることを考えれば、多治見が住みたいまちになるのではないか。

委員 T G K 48 プロジェクトは元気な高齢者の「趣味」「いきがい」では成功事例と考え、同様な施策が増えることを望むが、高齢者の活用で何か施策はできないか。例えば、活躍の場を探すことができるシニア向けのHPや、オトパ（お父さんお帰りなさいパーティー：定年退職したお父さんを地域でお祝いし、地域参加のキッカケを作る）があるのでは。

子ども支援として、他の委員と同様に児童館の活用があるのではないか。遊びの場、生涯学習の場、地域の寺子屋、地域の託児など地域が集まれる場になってほしい。

委員 20代の働く場がないのではないか。やはり、地域経済が重要ではないか。陶器商として大手インテリア小売業と競争しているが勝てる気がしない。大手流通業に左右されるまちになっているのではないか。ベットタウ

ンとして発展した多治見市では、半数をベッドタウンとしての雇用（名古屋等への通勤）、半数が多治見市での雇用（陶磁器等）で生活していけるようにしなければならないのではないか。

子どもが誇れるようなまちになってほしいが、そのためには産業を支援する必要がある。

委員 子育て支援には働く場が必要といわれるが、正しいのか。東京と沖縄を比較し、経済的に東京の方が優れているが、出生率は沖縄の方が高い。この違いは、子育てで頼れる人がいるなど、人と人とのつながりだと思う。

しかし、働く場も生活の土台となり重要であるため支援が必要だが、働く場の確保を行政の最終目標とすると「多治見らしさ」がなくなるのでは。多治見市は美濃焼のまちだが、美濃焼の原料である粘土は昔の地層からとっている。そんな長期的・文化的な視点が必要ではないか。都会と比べ心の広い気質も大切にしたい。繰り返しになるが、働く場と「多治見らしさ」を並行して進める必要がある。

委員 人口を増やすためには、産業の発展が必要ではないか。

子どもが大きくなって正社員として働ける場が必要であるため、企業誘致を進める必要がある。それにより税収も増える。

住宅団地の再編はできないか。大きな団地では空き家が増えており、住民を空き家などの活用により集約し、住民の移動により再編した土地に大学を誘致するなどしてはどうか。

人口を増やすためには、思い切ったことをしなければ無理ではないか。

委員 日本経済の20年、30年後は研究開発に力を入れ、世界と協調する必要がある。

多治見市では、リニアの開業により、産業的な影響度は大きい。また、陶磁器産業で培われたセラミック研究や日本列島の中心部にある地理的要因も優位である。さらに観光資源・文化資源があり、これらを上手に使い、発信する必要がある。また、名古屋など近隣市で規模の大きい都市とは、「多治見らしさ」を打ち出して差別化し、小さくてもきらりと光る東濃の中心都市になってほしい。

また、大企業では既に取り入れられているが、行政では取り入れられていないISO26000を導入してはどうか。

会長 消滅可能性都市を過大に捉えるのではなく、人口減少の警鐘と捉えて対応していく必要がある。

市の中心部を高度化する必要はあるが、郊外部のコミュニティは文化的に力があるので支え、つなげる必要がある。そのため、中心部を共有するまちづくりが必要ではないか。住宅団地を孤立させない、包容力が必要である。地域ごとに多様性があるので、その多様性を生かすことができるのではないか。

多治見市は陶磁器だけでなく、文化もあるので、それを生かしてはどう

か。

3 その他

事務局 第5回多治見市総合計画策定市民委員会は5月19日（火）
第6回多治見市総合計画策定市民委員会は6月8日（月）
第7回多治見市総合計画策定市民委員会は6月29日（月）に開催する。

<会議終了>